

平成 25 年度 インクルーシブ教育システム構築モデル事業 成果報告書
【インクルーシブ教育システム構築モデルスクール】

教育委員会名	宮城県教育委員会
--------	----------

概 要

モデルスクールの概要（平成 25 年 5 月 1 日現在）

	モデルスクール名	幼児児童生徒数	教職員数
1	栗原市立栗駒南小学校	183 名	20 名

【事業概要】

1. モデルスクールの特色（特別支援教育に関する事項）

- ① 宮城県北部，栗駒山の麓に位置する学校で，教育事務所管内では中規模の学校である。地域との連携を通した豊かな心を育む教育活動，また，勤労体験を通し，たくましく生きる力を育む教育活動などを積極的に実践している。
- ② 校長をはじめ，教職員の間に特別支援教育に関する理解があり，学校一丸となった研究への取り組みが期待できる。
- ③ 特別支援学級を 5 学級（知的，自閉・情緒，病虚弱，肢体不自由，難聴）設置しており，合理的配慮について研究を進めていく上で，障害種別の事例抽出が期待できる。
- ④ 平成 25 年度には LD 等通級指導教室も設置し，地域における特別支援教育推進校としての期待も大きい。
- ⑤ 明るく素直で親切的な児童が多く，特別な支援を必要とする児童への接し方も良好である。
- ⑥ 市の教育委員会，教育事務所等からの期待も大きく，研究指定にふさわしい学校である。

2. 取組の概要

【教育委員会がモデルスクールに対して行った取組及び支援】

- ① 定例で開催される運営協議会での助言を行った。
- ② 運営協議会については，合理的配慮協力員のほか，教育事務所，市教育委員会などからの意見や助言も踏まえて，地域のニーズに基づいた支援を実施していくための協力体制を構築してきた。
- ③ 研究過程における研修会の開催時には，近隣の幼稚園，小・中学校，高等学校等への開催案内を送るよう助言し，地域ぐるみの支援体制構築を目指した。
- ④ 研究推進状況や成果を研修会等の機会に広く報告し，他の学校での実践につなげられるように支援・助言を行ってきた。

【モデルスクールとして行った取組】

① 医療機関との連携について

医療機関への療育相談に教員が同行して児童の状態を把握し、身体機能の維持につながる取組への助言を得て、個のニーズに応じた自立活動の指導・支援に取り組んだ。

② 教育方法の工夫について

課題への動機付けや、見通しをもって取り組めるように分かりやすい手順を示し、遂行可能な課題の量に調整した。

また、情報端末を活用し、学習意欲の喚起・維持、発表する力の育成に努めてきた。具体的な取組としては、聴覚に障害のある児童には語彙の理解に向けた配慮として、読み聞かせや言葉を調べる楽しさを味わう学習機会を設け、視覚優位の特性の児童には録画機能を活用するなど、繰り返し学習できるように支援した。手指機能の維持や向上を目指して、パソコンで記録をとることを指導した結果、本人の自信にもつながった。

③ 学習環境の整備について

雑音の軽減を図ったり、正しい姿勢を保持させたり、課題以外のものに注意がそれないように配慮するなど、集中して学習に取り組める環境づくりを心掛けた。

長時間、座位のまま集中して学習することが難しい児童への教科指導では、ICT機器を活用し、無理なく安心して学習できる環境づくりを心掛けた。

3. 成果及び課題

【成果】

① 授業提供による合理的配慮を検証

授業検討会等の研究活動を推進していく中で合理的配慮協力員等の専門家からの指導・助言を受け、個々のニーズに応じた合理的配慮について検証し、それぞれの障害特性に応じた配慮の仕方を、通常の学級担任も含めた全教職員で学び合うことができた。

② 基礎的環境整備の充実について

多様な障害種の特別支援学級を協力学級の隣の教室に配置するなど、学習環境を計画的に整備したことで、児童も教師も行き来がしやすくなり、交流及び共同学習をスムーズに行うことができた。さらに、職員室内においても、協力学級担任のそばに特別支援学級担任の机を配置したことで、授業の打合せや児童の情報交換が行いやすくなった。また、複数の特別支援学級担任が協力して教材作成や指導の準備を行うなど、学校組織が一体となって児童の指導に取り組むことができた。

障害のある児童が運動するためのカーペット敷きのスペース、個別指導やクール

ダウンなどに使用できる間仕切りスペース，大きな作業台など，個々のニーズに応じたスペースを十分確保したことで，授業の目標に沿った個別の配慮を行うことができた。

③ 授業づくりについて

児童の認知特性や身体機能を生かしながら，どのような合理的配慮を行えば効果的な学習・活動につながるのかを深く考えることができた。言語指示だけでは分かりにくい点は視覚情報を交えたり，学習内容の振り返りに情報端末を活用したりすることによって，児童が意欲的に学習に取り組むようになり，成功体験を積み重ねることによって大きな自信につながった。

【課題】

平成 25 年度の研究の結果より，個々の児童の変容，効果的であった支援方法，新たに見つかった課題なども踏まえて，来年度以降の取組へとつなげていくことが大切であると考ええる。

平成 26 年度は，以下の 3 点を柱とした研究に取り組んでいきたい。

- ① 合理的配慮を行う児童のよりきめ細やかな実態把握
- ② ケース会議を活用した対象事例の合理的配慮の検討
- ③ 個別の指導計画作成における合理的配慮の検討（P D C A サイクル）